

Bermuda Burial  
1940  
C.Daly King

目次

間に合わせの埋葬

7

訳者あとがき 301

解説 森 英俊 304

## 主要登場人物

- マイケル・ロード警視……………ニューヨーク市警の警視
- サディアス・ステイル……………ロングアイランド在住の富豪
- ロバート・ダンスカーク……………ステイルの娘婿
- クロエ・ステイル・ダンスカーク……………ステイルの孫
- マリィ・マーカム……………クロエの保育士
- メリデン船長……………四軸<sup>Q</sup>ターボエレクトリック<sup>E</sup>推進船<sup>V</sup>ヘクイーン・オ  
ブ・バミューダ<sup>W</sup>号の船長
- デズモンド・ハートリー……………バミューダ警察本部長
- デルタ・レニー……………愛らしいアメリカ人女性
- エルドン・モルガン……………帰国途中のバミューダ人
- リチャード・フォラード……………粋がった向こう見ずな男

イヴ・フォラード	.....	その魅惑的な妻
ジヨセフ・カルバート	.....	休暇中の男
H・J・ルイス	.....	金持ちの男
イモージェン・ルイス	.....	その妻
エミール・ソンソ博士	.....	精神医学者
グリート・ソンソ	.....	その妻
ディッキーマー・ハロップ	.....	英国海軍の大尉
トライスモラン艦長	.....	女王陛下の船(ウオーマウント)号の艦長
デントン飛行中隊長	.....	英国空軍の少佐
シエルトン・リー	.....	アメリカからの訪問者
L・リース・ポンス博士	.....	統合心理学者

間に合わせの埋葬

アン・ヘフリンに捧げる  
バミューダを覚えているかい？

## 第一章 楽しい計画

事件は静かに幕を開けた。事実その任務なら、どの要素を取っても代わり映えしないはずだった。特筆すべきこともなくあつという間に片づくだけでなく、無事に完了したあかつきには、不相応なほどに楽しい報酬までがついてくる。ニューヨーク市警本部長室に足を踏み入れたとき、マイケル・ロード警視は、まさか自分がこれから虚偽と悲劇の迷路の中へ、そして彼のキャリアの中で最も鮮明で痛烈なものとなる体験に向かって一歩を踏み出しているとは、夢にも思っていなかった。

本部長室は冷たい印象の殺風景な部屋で、権威を象徴しているのは、天井の高さと目を引くほど大きく立派なデスクだけだった。いくつもの捜査がその部屋で始まり、幕を閉じてきた。期待通りの、あるいは予想外の告白で解決したものもあれば、最後に突然激しい残忍さが燃え上がったものもあつた。犯人の自殺に終わった事件も、ロードの記憶する限り一件あり、それは、今も前任の本部長にとって苦い思い出となつて残っていた。

現在の本部長は、部屋のデスクほど立派な人物とは言いがたかった。中ぐらいの背丈、薄茶色の髪の本部長は、前置き抜きで単刀直入に要点に入る男だった。常に監督する必要のある案件をいくつも抱えていては、そうせざるを得ないのだ。

「かけてくれ、ロード」本部長が中へ招いた。「今回は外交局からの依頼だ。ロングアイランドで著

名人がらみの誘拐予告があった。名指しされた対象者たちは難を逃れるためにニューヨークを離れるらしいのだが、きみに同行してもらいたい。誘拐犯の手の及ばないバミューダ諸島へ行くのだ。きみにきみには島に到着するまでの警護はしてもらおうが、彼らがハミルトンの埠頭に降り立つと同時に任務は完了だ」そう言つて不意に付け足した。「きみは休暇には運がなかつたんだつたな」

ロードは苦笑を浮かべた。「これまで休暇と言えば、たいいてい行きずりの事件に巻き込まれて終わつてしまいました」彼は認めた。「それに——いえ、もう済んだ話です」最後に関わつた事件の結末と、その犠牲になつたら若い女性のことを、ロードはまだ忘れられそうになかつた。たぶん一生忘れることはないだろう。

本部長は鋭い目でロードをみつめ、さりげなく言った。「向こうに着いたら、そのまま二週間ほど滞在して島を見て回るといい。バミューダに行くのは初めてだろうか？ 緊急の際には電報で知らせる」

「それはありがたいお話です、本部長」ロードの声には驚きと深い感謝がこもつていた。「そうですね——ええ、おかげで元気が出そうです。それにしても、そもそも管轄外の誘拐事件にわれわれが関与するのは、どういうわけですか？」

「簡単な話だ。これまでは地元警察が担当していたのだが、二通目の予告状が届いた時点だったか、司法局が介入してな。対象者一行がニューヨーク市内を通過して船に乗り込むまでの警護を、当然ながらわれわれに依頼してきた。だが、実は判事が」本部長が話を続ける。「ちよつどワシントンから、何というか、非常に大きな圧力をかけられていて、一行が無事に外国の土を踏むまでの付き添いも頼んできたのだよ。船上も英国領に当たることを知らないのかもしれない。あるいは、必要以上に手厚い



警護をしているとワシントンに主張したいだけなのか。何にせよ、おかげできみは無料で船旅ができるわけだ、異存はあるまい？」

「ありませんとも」

「よろしい、では詳細に移ろう。当然ながら、きみには予告された誘拐についての捜査は不要だ。それはわれわれの管轄外で起きたことだからな。対象者がニューヨーク市内に入った時点からハミルトンの埠頭に着くまで。その区間についてのみ、犯罪に巻き込まれないように警護するのが任務だ。この件にわれわれは一切かかわってこなかったが、事件に関するファイルがある。必要なことはこれを見ればすべてわかるはずだ」本部長はデスクの右側に積み上げた書類の中から大きな茶封筒を引っ張り出した。

「この中にあらゆる資料がそろっている。要点だけかいつまんで説明しておこう。今、きみの分のコピーを一式用意させているところだから、帰る前にマクヘンリー警部から受け取っておいてくれ。話を始めてもいいかね？……五年前にダンスカークという男がステイル家の娘と結婚した。ステイルの両親はロングアイランドの富豪だ。著名人でもあり、権力者だ。ステイル家の主人がそれまでにあつた小さなダム<sup>ダム</sup>の総数を上回るほど多くの巨大ダムを国内外に造ってきたことは、きみやわたしを含めて何百万人もの人間が知っているはずだ。彼とは何度か社交の場で顔を合わせたことがある。きみもどこかで会っているんじゃないか。ずけずけと物を言う粗野な男で、数少ない友人と、それ以上に多くの敵を作ってきた。ヘステイル・ダム協会——あるいは人呼んで「<sup>ダム</sup>ヘクソステイル協会」——は、彼の引退後は以前ほどの勢いはないようだが、それは彼の子どもはひとり娘のルーシーだけで息子がいないせいだ。

ルーシーは自分より十二歳年上の作家、ロバート・ダンスカークと結婚した。作家と言っても、ベストセラーを書くような大物のたぐいではない。新聞の書評欄のおしまい辺りに「大衆向けフィクション新作」という見出しで紹介されるような作品を書いている男だ。つまり、百万長者とは言えないが、ひとりなら十分に暮らせる稼ぎはあるということだ。彼女は男の外見、彼は女の財産に魅かれて結婚したと噂されるのもしかたなからう。なにせ、彼女はサディアス・ステイル譲りの、えらの張った長い顎の女だったからね……家族に関する情報はそんなところだ。

一年半ほど前に、クロエ・ステイル・ダンスカークが生まれ、ほぼ一年前に、ルーシー・ダンスカークが死んだ——自動車事故だった。その事故でダンスカークも脚を骨折し、腰を負傷した。この資料によると彼女の死因は窒息らしいのだが、ダンスカークが妻の遺産を百万ドルも相続していたのなら、わたしも疑いの目をかけているところだ。自動車事故の犠牲者が窒息死することはめつたにならな。だが、膝掛けの紐が巻きついたりしたのかもしれないし、どのみち彼はほとんど何も相続することはない。妻の母親のマーガレット・ステイルと、何と言ってもサディアスが生きているのだから当然だ。ロングアイランドじゅうで周知の事実を、ダンスカークが知らないわけがない。

六週間前に——正確には先月の四日だな——ロバート・ダンスカークは、こんな手紙を受け取った。上質の原稿用紙が使われている。

拝啓

これは貴殿が真剣に考慮すべき要求である。われわれはクロエ・ステイル・ダンスカークの誘拐を企てている。これは純然たる金銭目的の計画であり、その対価は十五万ドルとする。今すぐに

支払うか、誘拐後に支払うかは貴殿の自由だ。すぐに払うなら、そちらは不都合や不安を回避でき、われわれは、すでに決行するばかりの犯行を取りやめるにすぎない。貴殿に要求額の手持ちがないことも、どうすれば工面できるかも、われわれは承知している。(タイムズ)紙の個人広告欄に次の通り掲載せよ。(パパへ、バーから帰宅されたし、クロエ)掲載後にこちらから支払いの日時と方法を知らせる。この書面を誰に開示してもかまわないが、われわれがふざけていないことは、しかと頭に刻んでおけ。

## K U N D R I K S

きみはどう思う?」

マイケル・ロードは立ち上がってデスクを回り込み、部長の肩越しに書面をじっとみつめた。やがて口を開く。「この手紙からさまざまな情報がわかりますね。まず最後の部分ですが、(K U N D R I K S) というのは(D U N S K I R K)のアナグラムと見受けられます」

部長が低く唸った。「うむ。それに、原稿用紙を使っている点も見落とさなくてくれ。この二つをとつても、赤ん坊の父親の成功を妬んでいるライバル作家の誰かだと思わないか? パパを飲んだくれ呼ばわりするだけでは足らず、苗字までいじってみせたのだろうか? 何にせよ、頭のいい人間の犯行だな」

「頭がいいというより、学があるという点では同感です。この手紙の文面は、説明が極めて明確ですから。ただ、ライバル作家という見立ては疑わしくありませんか。第一、パパは大して成功してい

ないという話でしたね。この手紙で際立っているのはうぬぼれであって、妬みではありませんよ」

「その通りだ。誘拐犯はうぬぼれ屋と決まっている。この街でも、近頃は誘拐の口口が大胆不敵になっている。この紙が使われているのを見ても、きみが犯人を作家だと思っていないのは安心した。わたしは作家であつても、脅迫状を書くのに自分の原稿用紙は使わないだろう。たとえ同じ紙を使う作家がこの街だけで何千人もいたとしてもだ。方眼紙か、絵描きの使う画用紙か、あるいは建築家が設計図を引く青写真の紙なんかを入手するだろうな。わたしが生意気——あるいはうぬぼれ屋なら、安物の紙は使わない。きつとこのカンドリクスというのは、われわれ警察を見下すような小説を読み過ぎておられるだろう。こうして考えると、〈カンドリクス〉と名乗っていることもさほど頭がいいとも思えないな。安っぽい悪知恵に過ぎん。やつが自らの特徴を明かしている箇所がもう一点あることに、きみも気づいているだろう?」

「ええ」ロードが認めた。「文中の〈aint〉と、この単語は〈am not〉の短縮であつた、〈are not〉の短縮ではありません。主語の〈われわれ〉に対して〈aint〉を使うのは、大衆向けフィクションとやらを書く人間にしては教養がない気がします。これが芸術家や、近代的な教育を受けるのに苦労した人物なら間違えることもあるかもしれませんが。文章を書くことを生業にしている者には考えにくいですね」

「つまり、ライバル作家という線は消していいのだな」

「おそらく。もちろん、作家がわざとそういう表現をしたとも考えられますが」

「いや、それは考えないことにしよう」本部長は読み終わった資料の上に、予告状を裏向きにして乱暴に重ねた。「一旦AからBへ行った後でA1に戻れば、道を見失うというものだ。そこからさらに

〔著者〕

C・デイリー・キング

アメリカ、ニューヨーク生まれ。心理学の研究に従事し、コロンビア大学で修士号、イエール大学で博士号を取得。1932年、長編『海のおベリスト』で作家デビュー。〈手がかり索引〉の趣向を初めて導入した作家としてミステリ史に名を残す。

〔訳者〕

福森典子（ふくもり・のりこ）

大阪生まれ。通算十年の海外生活を経て国際基督教大学卒業。訳書に『真紅の輪』、『厚かましいアリバイ』、『消えたボランド氏』、『ソニア・ウェイワードの帰還』（論創社）など。

ま あ まいそう  
間に合わせの埋葬

——論創海外ミステリ 207

---

2018年3月20日 初版第1刷印刷

2018年3月30日 初版第1刷発行

著者 C・デイリー・キング

訳者 福森典子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1706-4

落丁・乱丁本はお取り替えいたします